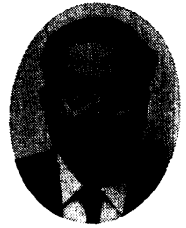


巻頭言



会長就任に際して

小林 宏治†



私はこの程、当学会の会長にとの推挙を受けまして大変当惑し、その任ではないと固辞したのでありますが、学会の諸事情から、たつとのお話で立候補を受諾いたしましたところ、凶らずも当選いたしましたので、非才をも顧みず敢えてこの重任を果たす決意を致しました。幸いにして練達明敏の両副会長を始め、有能な役員諸氏がおられることでもあり、全会員諸君の支持のもとに、学会事務当局の一層の御精励を期待して、活潑にして効果的な学会運営に、できる限りの力を尽くしたいと存じます。

1960年に設立された本学会も、漸く成人の域を迎え、清新の気漲り、会員数も1万2千を算える大学会となりました。この間、会員諸君の精進はもとより歴代会長始め役員諸氏の不断的努力によって本学会が順調な発展を遂げ、今や国際的にも重きを加えつつあることは、まことに御同慶にたえないところであります。特に創立20周年を明年に控え、これを記念して展開される予定の諸行事、なかでもIFIP Congress 80の日本開催に向けて万端の準備を整え、これらを成功裡に挙げて、本学会を名実ともに世界的に評価されるものたらしめると同時に、これを契機に本学会の活動の一層の飛躍を期待したいと念願する次第であります。

言うまでもなく、情報処理科学は若い学問分野で、急テンポをもって進展しつつあり、研究対象範囲も、これが適用される社会活動の多様性に呼応して、多彩広範なものがあります。しかも、その発展方向には、いわゆる“定説”はなく、すべてが無限の可能性を秘めた存在であります。

これら多様性に富む状況は、一見、ややもすれば混乱を招きやすいのでありますが、私は、これを斯界発展のための天与の好機であると考えております。

私がこれを好機とする所以は、第1に、広範多彩の

専門分野の方々が、情報処理のより本質的で共通する拡張性ある学問・技術に対して、理解と協力に基づく推進の労を、積極的に結集して傾注するならば、必ずやその成果は学術の最先端において2乗、3乗の力となって作用し開花結実するであろうと予見されるからであり、第2には、革新的な学問・技術の進歩は、異なった専門分野の境界領域において芽生えることが多いという経験的事実から、この状況の中においてこそさらに幾つもの技術革新が生まれ、やがては社会に貢献し、これが学術文化の発展に大いに寄与するようになることを期待されるからであります。

学会にとって国際的な協調は特に重要であります。

わが国の情報処理界も、これまでは外国の技術を追うことに手一杯でありましたが、最近はどうやら自分のペースに乗せ得るようになってきたと思われるようになって参りました。しかし、そのペースに確実に乗せこれを維持して行くために注ぐべき努力の量は、今までよりもはるかに大きく、また考え方においても一層創造的なものが必要とされましよう。しかもそれらが国際的に調和のとれた、いわゆる“国際社会に通用するもの”でなければならないのであります。

このためには、本学会が国際情報処理学界のアジア地域における情報・連絡のセンターとでも言うべき機能を果たすべく国際的な連帯協調を強化し、研究成果についてもまた運営方法についても、格段の工夫と努力を要するものと考えております。IFIP Congress 80は、その試金石とでも言えるであります。

私は、当学会は勿論のこと、わが国の全情報処理界を、長期的な一つのシステムとして捉え、そのシステム効率を最大にするために、本学会として今なすべきことは何か、どうあるべきかを常に問い、学会運営に当りたいと存じております。

重ねて全会員諸君の深いご理解とご援助とをお願いいたします。

† 本学会会長 日本電気株式会社

(昭和54年5月18日)